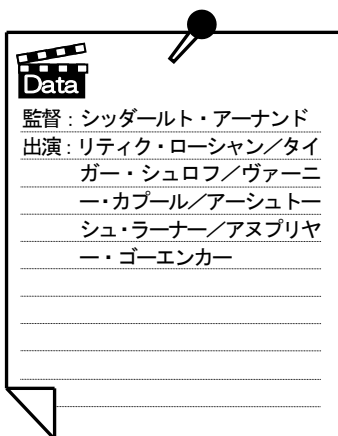




## ■■ショートコメント■■

◆本作のチラシには「今、人類史上最強のスパイ対決が始まる!!」の見出しが躍り、リティク・ローシャンとタイガー・シュロフ 2 人の精悍な姿が写っている。そして、そこでは、次の 4 点が強調されている。

①

2019年世界で一番映画が  
量産された国はインドである。  
ハリウッド、中国を凌ぎ、  
映画大国インドで国内映画  
興行収入No.1に輝き、  
更には、世界30ヶ国で大ヒットを記録した、  
まさに、キング・オブ・ムービーの称号に  
相応しい超大作の日本上陸!!  
敏腕諜報部員の活躍を描き、  
そして、アクション映画の限界に挑む!!

②

主演はインドの次世代を担う  
2大スターの豪華な顔合わせが実現。  
オリエンタルな魅力を持った  
**リティク・ローシャンは、**  
2018年、世界で最もハンサムな  
男性6位に選ばれたイケメン・スター!  
エキゾチックで端正な顔立ち! 劇中で、  
お得意のダンスを披露!  
日本人女性からも熱い支持を受けること確実の  
注目のアクター!!

③

さらには  
「ミッション:インポッシブル」  
「フェイス/オフ」  
「キングスマン:ゴールドエンサクル」  
「ワイルド・スピード」など  
数多くのアクション映画  
のオマージュが満載!  
映画ファンは、  
いくつのオマージュを当てられるか?  
高濃度なアクションと共に、  
オマージュも堪能出来る!!

④

そして、新たなアクション・スターの  
代名詞と言っても過言ではない  
**タイガー・シュロフ。**  
彼は、ジャッキー・チェン、トニー・ジャ-級の  
極限のスーパー・アクションを披露!!  
アクション、サスペンス、  
そして、インドのお得意のダンス!  
**イケメン! 美女! 豪華な世界ロケ!**  
従来のインド映画の枠を超えて、  
すべてが集約された  
最強のエンタメ映画の登場!!

◆私は300億円の興行収入を挙げたという『バーフバリ 王の凱旋』(17年)、『シネマ41』141頁)がインド映画最高の興行収入と思っていたが、本作のチラシには「世界30ヶ国を熱くしたキング・オブ・ムービーが、今夏、日本に上陸!!『サーホー』を抜いて、2019年インド国内興行収入第1位!!」と書いてある。これはあくまで2019年のランキングだから、さて、本作の興行収入の歴代ランキングは・・・?

◆インド映画も、近時は『ガリーボーイ』(19年)、『シネマ46』260頁)、『シークレット・スーパースター』(17年)、『シネマ45』304頁)、『パッドマン 5億の女性を救った男』(18年)、『シネマ43』199頁)、『ダンガル きっと、つよくなる』(16年)、『シネマ42』215頁)等、現実の問題点を見据えたシリアス(?)な映画が増えてきたが、本作を見ると、やはり「歌って踊って」がボリウッドの原点?そう思わざるを得ないが、そこにハリウッド流のアクションもの、スパイものの「売り」をてんこ盛りになると、本作のようになるらしい。その結果、チラシに見る上記③のような記載になるわけだが、はたしてその是非は?

ちなみに、本作は一種の「ライバルもの」だが、「スパイもの」「アクションもの」の中に「子弟もの」の要素をうまくみ合わせた名作『スパイ・ゲーム』(01年)、『シネマ1』23頁)と同じような「子弟もの」でもあるので、その人間関係の機微にも注目!

◆去る7月23日、米国のポンペオ國務長官が「我々が追及してきた関与政策は中国国内の変革をもたらさなかった」と述べ、中国を国際社会に組み込む長年の「関与政策」からの転換を図る姿勢を強調した。さらに、中国の習近平国家主席を名指しして「全体主義イデオロギーの信奉者だ」「中国の共産主義に基づく覇権への野望を長年、抱き続けている」と批判したから、すごい。このように、近時、米中の「新冷戦」構造が強まっているが、その行きつく先は?

他方、あまり知られていないが、国境紛争をめぐる中印紛争も、戦闘部隊の小競り合いを含めて緊張度を増している。そんな昨今、インドにはRAW (Research and Analysis Wing) という対外諜報機関があることをあなたは知ってる?アメリカの対外諜報機関であるCIAはハリウッド映画ファンなら誰でも知っているが、RAWを知っている日本人は少ないはずだ。

国際的なイスラム教過激派テロリストを追っていたRAWのNo.1の腕利きスパイ、カビール(リディク・ローシャン)がこともあろうに裏切り?そんなカビールを憧れの上司としてだけでなく、父親同然に慕っていたのが、優秀な部下のハーリド(タイガー・シュロフ)だ。そんな状況下、ルトラ大佐はハーリドにカビールの抹消を命じたから、これによってカビールとハーリド2人の凄腕エージェントの死力を尽くした戦争<WAR>が始まることになるほど、なるほど・・・。

◆インド映画らしく(?)、本作も151分の長尺で、こってりした料理が次から次へと装いを凝らして提供されてくる。そのメインは、全然名前も役割も覚えられないたくさんの同僚たちを交えたスパイ合戦アクションだが、それが時々、歌って踊る巨大ステージにとっ

て代わるのが本作のご愛嬌だ。

他方、「007 シリーズ」では、スパイ合戦とアクションの他、美女の登場がバランス良く配置されているが、本作では美女ナйна（ヴァーニー・カプール）のウエイトが極端に少なく、刺身のつま程度に抑えられているのが特徴（不満）だ。後半に『フェイス／オフ』まがいの（？）複雑なストーリーを入れ込むのなら、その分をもう少し美女とのロマンスに割いたほうが良かったのでは？

◆てなことで、若干のウトウトを含めて 151 分間、インド映画の神髄（？）を満腹した（？）が、これでしばらくはこの手の映画はお預けにしよう。

2020（令和2）年7月28日記